

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

山峰潤也 キュレーター
Junya Yamamine / Curator



CREATOR INTERVIEW ^{No} 132

山峰潤也 Junya Yamamine

キュレーター／一般財団法人東京アートアクセラレーション共同代表

1983年生まれ。東京都写真美術館、金沢21世紀美術館、水戸芸術館現代美術センターにて、キュレーターとして勤務したのち東京アートアクセラレーション共同代表として、ANB Tokyoの企画運営に携わる。主な展覧会に、「ハロー・ワールド ポスト・ヒューマン時代に向けて」、「霧の抵抗 中谷芙二子」(ここまで水戸芸術館)、「恵比寿映像祭(第4回-7回)」(東京都写真美術館)や「The world began without the human race and it will end without it.」(国立台湾美術館)など。その他、ポーランドや韓国、スロベニアなどの展覧会などにゲストキュレーターとして参加。また「KAWS TOKYO FIRST」日本側監修(フジテレビ)、テレビ朝日のアート番組「アルスくん&テクネちゃん」監修などを務め、文化庁のアートプラットフォーム事業や文化経済戦略推進事業に携わるなど、シンポジウムの企画、編集、執筆、講演、審査委員など幅広く活動。最近では、文化やアートに関わる事業のコンサルや地域創生などに関心を持って活動。2015年度文科省学芸員等在外派遣研修員、学習院女子大学／東京工芸大学非常勤講師。

クリエイターインタビュー

再開発で生まれた廃墟をスクワットする



「良質なカオス」で人と人が出会う。

published_2021.12.15 / photo_yoshikuni nakagawa / text_koh degawa

東京都写真美術館、金沢 21 世紀美術館、水戸芸術館現代美術センターでのキュレーター経験を経て、「ANB Tokyo」を運営する一般財団法人東京アートアクセラレーションの共同代表に就任し、展覧会を企画・運営している山峰潤也さん。森アーツセンターギャラリーで開催された展覧会『KAWS TOKYO FIRST』では、日本側監修を務めました。「ANB Tokyo」では、キュレーターのファシリテーションによってアーティストが共鳴し合う形の展覧会を行うなど、新たな出会いから「既存のものとは違う何かが起こる場所」を提案しています。そういう場が、都市に何をもたらすのか。山峰さんに聞きました。

六本木に出現したミックスゾーン。

僕は、いろんなタイプの人が集まったり、出会ったりしてできるエネルギーや創造性を生み出せる場に興味があるんです。企画やディレクションをしている六本木のアートスペース「ANB TOKYO」も、アートの街六本木で、社会におけるミックスゾーンをつくれないう、というコンセプトで生まれました。

この始まりは、株式会社アカツキの代表、香田哲朗さんが「アートはいったいどんな求心力を持っているのか」という問いを持っていた時期で、その頃、このビルが定期借家が出てきたんです。そこから六本木にアートビルをつくらうということになり、相談に乗っているうちに本格的に一緒にやっていくことになったんです。

コロナの影響もあり想定外のことに見舞われつつも、オープンして展覧会を開いてみると様々な発見がありました。時勢柄、人と人の交流が少なく行き詰まりがちだった社会の空気を、アートの利害関係を超えた出会いが解いていったんです。展覧会では会社のCEOたちが集まって話したり、アーティスト同士が偶然出会ったり。普段とは異なる関係を構築する場として「ANB Tokyo」が機能するようになりました。



ANB Tokyo

一般財団法人東京アートアクセラレーションが設立したアートコンプレックスビル。意欲的に表現活動と向き合うアーティストのサポート、アートを軸にしたコミュニティの形成、展覧会やトークイベントの企画・運営を行う。株式会社アカツキの代表香田哲朗氏と、山峰潤也氏が代表を務める。

撮影：大木大輔

クリエイティブな場をつくるには、ファジーさが不可欠。

「ANB Tokyo」ができる前から、六本木にはすでに老舗のギャラリーが軒を連ねています。国立新美術館や森美術館のようながっちりとした美術館も、タカ・イシイギャラリーや小山登美夫ギャラリーのような力強いギャラリーもある。ただ、その中間にある目的の定まらないファジーな場所が足りていないように感じていました。

以前の六本木周辺には、「SuperDeluxe」や「magical, ARTROOM」のような何だかわからない場所が点在していましたが、こういうある種の " 空地 " があることで集まってくる人たちがいるし、そこで生まれる熱量やクリエイティビティがある。そういう場をつくりたくて、「ANB Tokyo」を立ち上げたんです。

これは、与えられた環境と予算で展覧会を実施できるようになった僕に対して投げかけられた新しい挑戦でもあります。これまではメディア論が主戦場で、「テクノロジーはどんな影響を社会にもたらすのか」「今のメディア環境で起こりうることは何なのか」といった問いを、展覧会を通じて投げかける仕事をしてきました。でも、そのメッセージを受け取った鑑賞者やボランティアの方から「伝えたいことは痛いほどわかりました。それで、私たちはどうしたら？」という質問が出てきて。そこから、この問いの行方はどうなるのだろうと考え始め、自分で投げってしまった問いを、自分自身も引き受ける必要があると感じたんですね。それで実社会の中で、新しい構造や事業を構築していくことに関心を持ち始めるようになりました。



山峰潤也 キュレーター
JUNYA YAMAMINE / Curator

published_2021.12.15 / photo_yoshikuni nakagawa / text_koh degawa

出会ったことのない人たちが出会い、発火する。

「ANB Tokyo」は異なるコミュニティの人たちや面白い才能を持った人が交わる中から、新しいものが生まれていくことが大事なので、トップダウンの従来のキュレーションで展覧会をつくるのではなく、何かが生まれる状況そのものをつくるのが重要だと思いました。一見、作家同士がごちゃごちゃとやっているように見えるキュレーションも、作家同士や鑑賞者同士を結びつけるミックスゾーンを起こそうとしているもの。出会ったことのない人たちが遭遇し、出会い、発火する。こういった状況を準備しておく、集まってくる人たちがいて、彼らとそこで生まれる出来事とを結びつけ、両輪で回すことに挑戦しています。

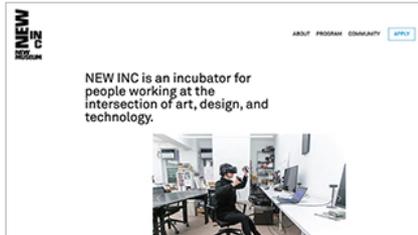
ミックスゾーンをつくることに成功している事例は、海外に多くあります。例えば、ニューヨークにある非営利の文化センター「Pioneer Works」。アートと科学の実験場のようなところで、様々なコラボレーションや事業が生まれているようです。まだ行ったことがないので、いつか行ってみたいです。同じくニューヨークにある現代美術館の「New Museum of Contemporary Art」には「NEW INC」というインキュベーション施設が併設されていて、これも面白いミックスゾーンではないでしょうか。



Pioneer Works

ニューヨーク市のレッドフックにある非営利の文化センター。アートと科学を通してインスピレーションを与えるコミュニティづくりをすることを目的としている。制作やアイデア交換の場、道具などを提供し、資金の85%は参加無料のプログラムに使われている。

撮影：Taylor Nelson



New Museum of Contemporary Art / NEW INC

1977年にマーシャ・タッカーによって開館したコンテンポラリーアートの美術館。若手作家や革新的な作家の展示を行うことで知られる。2007年に移転、再開館した際の設計は、SANAAとGensler。「NEW INC」は、2014年に新設されたアートインキュベーション施設で、アート、デザイン、テクノロジーに特化したビジネス支援やプログラムを実施している。

<https://www.newinc.org/>

このような営みを成功させるには、どんな価値が生まれるのか予測しづらい取り組みに対して立てる KPI 等の効果測定、評価にも多様さが求められますよね。欧米、西欧にはそのようなミックスゾーンが社会に与える影響を可視化する仕組みや、文化や福祉といったソーシャルセクターのアントレプレナーシップがあるし、富裕層や大企業がアートを支援するフィランソロフィーが根付いている。それらがミックスゾーンの成功の基盤になっているんだと思います。

「テーマを放つ」「人生に寄り添う」「無作為な熱量を信じる」

僕がキュレーションをする時に大切にしている手法は、3つあります。まずは「テーマをしっかり放つ」こと。社会的な状況を理解した上で自分なりの問いを立て、言葉では伝わりづらい、アーティストの個人的な目線や感覚的なことを内包したアートを通して、見る人の感情に届ける。それによって同時代を生きる人が開眼するきっかけをつくること。

次に、アーティストの「人生に寄り添う」こと。大御所であればその人のキャリアを見つめ、その人生が見る人の心の中で " 発火 " するところを見つけてテーマを引っ張ってきます。若手であれば、作家人生のターニングポイントになるような問いかけをして、作品が出てくるのを待つ。時に語り手のように、時にメンターのように、アーティストの人生に寄り添うのもキュレーターの仕事です。

そして、「生まれてくる熱量を信じる」こと。WIP（＝ワークインプログレス）のわらわら、もやもや、もこもこしている状態を受け入れて、何ができるかわからない状態から種が出てくるよう、ファシリテーションをする。そうすることで、出会ったことのない人たちが出会い、発火する瞬間をつくることができる。

例えば、あるアーティストがネオン管を用いた作品を持ってくることがわかると、それを受けて別のアーティストが自分の作品に活かす。そういった交歓の中から生まれる熱量を信じて曖昧な状態を受け入れながら、その中にある魅力を磨いていくことで、これまでと違う面白い展覧会ができるんです。「ANB Tokyo」で行っている展覧会『Encounters in Parallel』も、普段別々の場所で平行に制作をしているアーティスト同士が遭遇するという意味を込めてつけたタイトルです。



Encounters in Parallel

ANB Tokyo で 2021 年 11 月 27 日～12 月 26 日の間に行われる企画展。2020 年のオープン時に 26 組のアーティストが集結し行われた企画展『ENCOUNTERS』をアップデートしたもの。4つのフロアを使い 11 名のアーティストが同じ空間を共有しながら作品を発表する。

会場：ANB TOKYO (東京都港区六本木 5-2-4)

会期：2021 年 11 月 27 日(土)～12 月 26 日(日)

https://6mirai.tokyo-midtown.com/event/encounters_in_parallel/

日本はアート領域でもガラパゴス化していく。

日本ではアートマーケットが育たないと言う人がいます。たしかに、日本のアーティストが世界のアートマーケットで扱われている割合は、数 % です。けれど、これでも数年前に比べると劇的に活性化しました。渋谷西武や伊勢丹のような、もともと古い芸術を扱っていたところもどんどん現代アートを扱い、評価されるようになっていきます。

それでも日本におけるアートマーケットは依然として小さく、昨今は、中国を除くアジアの現代美術の拠点が韓国に移っている感覚があります。そして、日本はあらゆる領域において「鎖国」の感覚が根強いと感じています。アート領域も例外ではありません。しかし、世界各国がしのぎを削る国際戦に、当然のように世界の一員として挑むという感覚ではなく、日本独自のマーケットの中で何をやるかという感覚がいまだに強いのではないのでしょうか。韓国は、昔から世界を意識してマーケットを進化させてきました。その成果がアート領域にも表れているんです。

グローバルスタンダードのアートを横文字で「Art」、日本独自のアートを日本語で「アート」とした場合、日本の一般人にとって「Art」はまだ浸透していないと思うんです。反対に、若いうちから海外に出ていくようなアーティストは「Art」を意識している。ですが、日本固有の「アート」が国内で広まってくると「Art」との乖離が大きくなってガラパゴス化していくのだと思います。日本のポピュリズムやマーケットの価値観に偏った「アート」が大きくなっていくと、世界的に通用する分脈で勝負したいアーティストにとっては、日本が非常に難しい環境になってきます。ですが、そこで日本の状況に沿っていくと国際的な動向から外れた存在になってしまうので、若手アーティストはこういった日本独自の「アート」観に踊らされないことが重要で、海外に出てみるというのもひとつの手段かもしれません。



山峰潤也 キュレーター
JUNYA YAMAMINE / Curator

published_2021.12.15 / photo_yoshikuni nakagawa / text_koh degawa

アートを起点に変化する都市のダイナミズムと有機的なカオス。

僕の好きな場所のひとつに、ロンドンの「Tate Modern」があります。テムズ川沿いにある国立の近現代美術館で、火力発電所が美術館として生まれ変わった場所です。ここが好きな理由は、美術館につくり直したことで街のカラーが変わっていったこと。廃墟化した火力発電所の周辺は治安の悪い街だったのが、美術館ができたことで街そのものが変わっていった好例です。美術館がひとつできたことで、地域のイメージが更新されて、その後は自然発生的にジェントリフィケーションが起きる。日本における美術館と都市の関係の成功例としては金沢 21 世紀美術館が挙げられますね。



Tate Modern

イギリス・ロンドンのテムズ川畔、サウス・バンク地区にある国立の近現代美術館。テート・ブリテンなどとともに、国立美術館ネットワーク「テート」の一部をなしている。バンクサイド発電所だった建物を改築しオープンして以来、地元の人々や観光客に非常に人気のあるスポットとなっている。

別の例で、現在は「MoMA」の別館となっている「PS1」という場所があります。1971年にアラナ・ハイスが「芸術と都市資源のためのインスティテュート」という組織をつくり、廃校を使って「PS1 現代美術センター」を発足したのが起源です。その後、治安が悪かったニューヨークでアーティストがイニシアティブをとるユニークな文化スペースとなっていきました。この例が教えてくれるのは、何が起こるか分からない場所＝良質なカオスを、コミュニティの一員として社会が " 抱えて " おくことは見えづらけれど意味があるということ。長期経済の視点が街づくりに持ち込まれ、新しい価値の効果測定ができるようになると、デベロッパーもちゃんと投資することができるようになる。

新陳代謝する都市の隙間を占拠する。

六本木は、再開発でたくさん廃墟が出てきていますよね。あの廃墟をスクワット（＝空き家等を無断で占拠すること）できたら面白い。再開発という街が新陳代謝する時に、廃墟を使ってできることがあると思うんです。「ANB Tokyo」を通して熱量が高まっている人たちが出てきているし、僕自身も美術館で働いていた時よりも視点到に広がりが出てきたので、六本木の街中でスクワットをやってみたい。

廃墟は、都市における隙間のようなものです。そういう隙間があると、使う人たちが出てきて、そしてそれを許容するカルチャーがあることが都市にとって重要なんです。隙間のような場所に、少しのルールがあり、それにのっとれば何かができる。そこで何が起こるかはわからないし、場所とともにいつかは消えていってしまうけれど、その街にいた人の記憶にはきつと残るはずですよ。



published_2021.12.15 / photo_yoshikuni nakagawa / text_koh degawa

当たるも発見、当たらぬも発見。都市には寛容さが求められる。

都市の寛容さと言っても、スクワットをしてもいいですよ、と許可を与えてそこで起きることに何かを期待するのは違うと思います。当たるも発見、当たらぬも発見、という寛容さを持っているからこそ出てくるセレンディピティを楽しむ、くらいのスタンスがちょうどいいのではないのでしょうか。

いい事例に、千葉県松戸の「まちづくりエイティブ」という会社が起こした民間の街づくり活動があります。空き家問題が深刻な松戸で、その家をアーティストに転賃借して街づくりを凶るというもので、「MAD City」と名付けて様々な改装可能な物件を紹介しています。この例の良かったところは、原状復旧の必要がないことなんです。うまいですよ。そうすると、アーティストは好き勝手やる。好き勝手だけど、アーティストもそこに住むわけなので生活しやすい環境にはなる。そういう遊ばせておく力が、場を提供する側には求められるのです。

何が起こるか分からない場所や出来事に過度に期待しすぎず、自由にさせておく。これが「良質なカオスを社会が抱えておく」ことの秘訣なんだと思います。



まちづくりクリエイティブ / MAD City

千葉県松戸市を中心にサービス提供を行う、自立的な地域活性をデザインするまちづくりの会社。ターゲット地域を絞り込み、小さな範囲で歴史文脈に根差したエリアブランディングを構築することから始まる、総合的なエリアマネジメントを提供している。「MAD City」は、空き家の活用とクリエイティブ活動を結びつけ、クリエイターの活動支援を行うプロジェクト。

<http://www.machizu-creativ>

撮影場所：ANB TOKYO 『Encounters in Parallel』（開催中～2021年12月26日）

取材を終えて……

海を埋め立て、急激に再開発が進んだ街で働いていたことがある私。整然とした街並みを眺めては、「整ってるんだけど、なんか足りないんだよな」ともやもやしていた記憶があります。取材で「何が起るかわからない場所」というキーワードを聞いて、「それだ!」と思いました。予測不可能で、めまぐるしく変化する熱量を持った都市の隙間。そういう「あそび」の部分があるから、都市を自分の居場所だと思えるのかもしれない。六本木の廃墟でスクワットが始まったら真っ先に取材に行きたい! (text_Koh Degawa)